

衣食住遊

第八回

「聴竹居」に学ぶ日本人の暮らし

文松隈章

Matsukuma Akira

まつくま・あきら／㈱竹中工務店設計本部設計企画部副部長、聴竹居倶楽部代表、一般社団法人住宅遺産トラスト監事。2010年より本社設計本部所属。設計業務の傍ら近現代建築の保存活用やGALLERY Aでの企画展をはじめとする数多くの建築展に携わる。著書に『聴竹居 藤井厚二の木造モダンズム建築』（平凡社）コナブックスがある。

灯台もと暗し、自らのことはなかなか分からないものだ。

ここ数年、インバウンドという言葉をよく耳にするが、京都や東京などの著名な観光地に限らず、各地で外国人観光客の姿を目にすることが多い。私たちが忘れていた日本の優れたところを彼らが敏感に感じ取り、貪欲に体感、吸収している。一方、無国籍なデザイナーの建物に住み、おびただしき情報が飛び交う現代日本において、日本人が「日本人の暮らし」を意識することはほとんどない。ところが、その「日本人の暮らし」の原点を教えてください。理想の住まいが、京都・大山崎にある。今も約90年前の姿のままひっそりと佇む、建築家・藤井厚二（1888〜1938）の自邸「聴竹居」（1928年竣工）だ。

藤井は、教鞭をとった京都帝国大学で自らはじめた環境工学の知見を活かし、日本の気候風土と日本人のライフスタイルや感性に適合した、新しい時代の「日本の住宅」を志向し実践した建築家。世界の気候風土と比べつつ、「聴竹居」を実例として図面や写真で紹介しながら、「日本の住宅」という考え方を欧米で紹介する英文書『THE JAPANESE DWELLING-HOUSE』（明治書房刊。以下、邦訳は全て松原裕美子氏による）を1930年に発行している。

同書中、藤井は床の間について、「日本の住宅内部の装飾は、非常に簡素だが趣味の良いものである。欧米の住宅ではしばしば絵画や彫刻が豊富に、しかし乱雑に並べられ、季節を通じて不変のままであるのとは非常に異なっている。このような方法で住宅の芸術品展示室をつくる代わりに日本の部屋は床の間と呼ばれるもの、すなわちアルコーブを持っている。それが部屋の最も目に付く



Photograph by Furukawa Taro

Chouchikukyo

部分を占めており、芸術品が中に配置されている。芸術品以外にも花やその他の美しい自然の品々がそこに置かれる。調和が日本の家の装飾の真髄であり、（中略）床の間では、そこに目を留める人への啓発のためにふさわしく配置された品物によって一種の無言劇が演じられている」という。また、縁側について、「日本の家では、主な部屋は外側に縁側があり、その上には大きく突出した軒があるため、部屋の内部と外部の境界線がどこにあるのか厳密にいうことは難しい」と記す。日本人の生活感覚にも触れる、注目すべき指摘だ。

藤井が世界に向けて発信したのは、「日本の住宅」は外部に対して閉じたハコではなく、人の営みと自然とをつなぐデザインがその基本であるということだ。風景になじむような色や材料、形態に細心の注意を払って建物を周辺の環境に同化させ、窓からはすりガラスや障子を通した柔らかい自然光と四季折々の変化を見せる美しい風景を取り入れる。また縁側を設け、内部空間と周囲の自然を上手く融合させる中間領域をしつらえる。さらに「茶」「花」「陶芸」などの生活文化を嗜み、自然と一体になることとの豊かさや心地良さを綿密にデザインし、愉快に暮らす。それが、藤井のいう「日本の住宅」のありようであり、自らが完成形とした「聴竹居」を通じて私たちに伝えたかった「日本人の暮らし」の理想形だった。

「その国を代表するものは住宅建築である」という名言も遺した藤井。「聴竹居」に学び、豊かな「日本人の暮らし」を再び取り戻すことが、3・11を経験した今、大切なのではないだろうか。彼のこうした発想の原点は、1923年に関東大震災の惨状を見たことにあるのだから。